



尾崎紅葉集
泉鏡花

日本文学全集 2



筑摩書房

日本文学全集 2 尾崎紅葉集
泉鏡花

昭和四十五年十一月一日発行

著者 尾崎紅葉
泉鏡花

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 多田印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

尾崎紅葉集 目次

多情多恨

五

拈華微笑

一八

病骨録

一五

泉 鏡花集 目次

日本橋

三二

夜行巡查

三四

外科室

三五

照葉狂言

三三

高野聖

三六

いろ扱ひ

四七

年譜

人と文学

福田清人 著

三
四

口絵写真提供（尾崎紅葉）
講談社

尾崎紅葉集

何事不為我
好花堪與誰

多情多恨

前篇

(一)

鷺見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに唯の今のやうにも想ふ。余り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の為に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも歛められたれば、葬送も出した、谷中の土に埋めて、榛の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、仮でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから、その情の篤いことは夥しいもので、実に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては、柳之助の夜は明けなかつた。彼の同僚は「妻が」先生と仇名を付けただけで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思はなかつた。謂はゞ通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。

例の同僚は嗤つた、鷺見は全力を挙げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、「全力を挙げて」とは嘲弄でない、適評であつた、適評ではない、事実であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顔色を悪くして鬱々ほどの愛著は、一週間経てど、十日経てど、乃至は一月、一箇年、十年が百年経たうとも、到底二度とは其姿を見られぬに極つた失望を忍ぶには余る。さて是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一箇の悲歎に沈むで、泣

くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我はない子供のやうに、「お前は何故死んだ。死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。」と、死顔の被を取つては、棺の前に坐つては、墓標を揺つては、位牌を眺めては、写真を取り出しては、声こそ立てぬが、心の中では悶へて絶叫した。

悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう為に泣きも悔みもするのではないが、或点まで泣き且悔みだらば、随分復る事との信仰を以て泣きも悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど柳之助は取乱したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は真摯に其死を悲む涙が催して来る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが、定命と諦めねばならぬ——諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世には帰らぬ人、これから長い——生涯もう逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ、味気無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日は全く生効の無い体になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間断無しに柳之助の胸の内を回転してゐる。甚麼に考へたと

ころが、此先の樂は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、愁ひ生残つて物を思ふも愁い。思ふまいとしても、忘れやうとしても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛と胸に集る。

「呸、酒でも飲もう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、内向に手枕をしてしふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて来て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俯いたまゝで、

「酒を一つ買つて来てくれ。」

その力無げに仆れてゐる躰を老婢は怪むで、

「どうぞ為さいましたか。」

と体を差入れる。

「可いから早く買つて来て。」と彼はなほ顔を挙げぬ。

「はい、はい。麦酒ならお内にございますが、やつぱり御酒の方が宜しうございますか。」

「麦酒でも管はん、早く持つて来てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その蹺音と俱に一陣の風は颯と梢を鳴して、吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい

音をして倏忽漢々濡になるのを、柳之助は纔に首を挙げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟元から蕭々と悪寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の内を、何と云ふ事は無しに惘然胸してゐる。爾時老婢は蠟色の田盆に、鉢に鶏子を三つ容れて、醬油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて、片手には桜田麦酒の栓を抜いたのを拵げて入つて来る。

「御火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて参りました。」

「あゝ、火を少し貰はうか。」

と其処に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸と見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち点々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを持つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壘を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。

柳之助はコップに半分ばかりを一息に嚙了けて、

「元、寂しいな。」と故と元氣よく言懸ければ、

「御尤でございます。」と元は益々泣く。

此挨拶では不足らしく、

「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急来る涙を防がう為に、余れる酒を又一息に呷と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥様の御手からでなくば御承知の無かつた旦那様が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷い。例ならば「頼さん」を呼べと有仰るのであるけれど、その奥様は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の涙はいと脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、涙を去むで、もう泣くまいと覺悟したやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は姻家の奥様も御帰になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」

と盆の物を安排して、鶏子を割つて其へ出しながら、

「何も御着がございませんので。本当は御精進なのでございますけれど、姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那様だけに御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鶏子も宜しうございませう。」

「あゝ、それぢや何か、姻家の御母様やお前は精進なのか。」

「はい。」と老婢は又少し萎れる。

「然うか。」と頭を掻いて、

「些とも気が着かなんだ。」

「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」

「いや、俺も其ちや精進にしやう。」

「然やうでございますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が。」

「仏の為だな。」

「然やうでございませうとも。」

と其可憐しさに老婢は又涙を誘はれる。

「唉、もう仏に成つて了つた！」

耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麦酒を尽して、ほうと息を吐く。老婢は起つて、火を持って来て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは酔つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、嘗然としてゐる。

元は火燵の始末をして、盆などを片寄せて、起たうとすると、主は弗と目を開いて、

「何時かな。」

その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて来やうかな。」

と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繫に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて来

たばかりである。それも近い所では無し、まして雨は降る日は暮れる、これから如何なさらうと云ふのか、と其気色をば候つたが、随分出掛もしさうな様子。

柳之助の身になつたらば、懐しい／＼遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追慕の渴を医するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を見ねると同じ意で、悲しさに堪へかねたればこそである。

恚う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は爰に思つた、些と気が如何かしたのではあるまいかと思つた。然う思ふと、何と無く可恐やうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遅うございますから、明朝になさいまし。」
「遅くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございせんか。那麼に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が、却つて仏様は御喜でございますよ。」

「然うかな。」と柳之助は稍折れる。

「これから御詣をなさいます代に、御仏前へいらしつて、御線香を多度お供げ遊ばしませう。」

子供が言聞かされたやうに、柳之助は惜々と領いた。墓詣は思止つた様子に、老婢は胸を安むじて、

「私も御回向を致しますから、いらつしやいまし。」

日暮に薄る空模様は雨の為にいと晦くなつて、製造場の漁笛が曇つた声で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫今夜も此寒い、陰気な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知らず衝と起つた。

起つた所で何所へ行くのである？ 此が自分の住居であれば、何所へ行つたとて、「類さん」は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を陶したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。例ならばラムプを持つて昇つて来る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ声が聞える時分だ。ラムプを持つて

来ぬ、元と呼ぶ声もせぬ、吁寂しい、寂しい、と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往来してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は台所から駈けて来ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考事をしてゐる眼色。

元は前垂で濡手を拭きく、
「何方へ行らつしやいます。」

と其舉動を見てゐる。

「一寸其所まで。」と極めて胡乱に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供けると有仰いましたのに、急に如何為すつたのでございます。」

恨しさうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて来る、どうも氣が済まんから。」

「御墓詣でございますか。」

柳之助は唯領いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此墓參を異変なものと思ひながら、氣が済まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は弥々氣味悪く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繋に其に理があるので、振攪つてまでも出やうとは為ぬけれども、又満足して思止ることも出来ぬので、益々烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

(二)

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軛を支いて、氣凛と雨具

に身を固めた車夫が背向になつて、前桐油を外してゐる。車の音を聞いた時に、柳之助は不図類さんが生家から帰つて来たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを覺つた。見覚のある此車は友人の葉山誠哉。

あゝ、葉山が来てくれた、と嬉しいやうな、頼しいやうな、それにも胸が逼つて、又涙が出る。

「おや、葉山様が入らつしやいました。好い所へまあ。」と老婢は頻に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革を掛けた新しい足駄で、細骨の蛇の目を挈げながら、

「あゝ酷い降だ。」と急いで格子の中に入る。

「此御天氣に好くまあ。」

と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脱がせる。柳之助は惺然した顔の、気の無い声で、

「さあ上りたまへ。」

客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて頻に愛相を言ふのが聞えた。

葉山は座敷へ入ると直に、

「おや、麦酒かい、洒落てゐるぢやないか。豪気だね、火燵は。」

と衝と入つて、

「あゝ寒い、寒い。」と肩を揺る。

性来の無愛相が、夢に心を奪れてゐるのであるから、柳之助の様子と云ふものは、無い！可厭な奴が来たと謂はねばかりである。けれども心の中はなか／＼嬉しいので、

「此方へ来たまへな。」

と壁際の自分の席を指すと、

「何有、此で可い、其代一盃戴かうか。今日は御見舞に来たのだ、然う／＼、持つて来たものがあつた。」

葉山は手を鳴して、

「車の中の包を。」と老婢に命じた。

元はやがて定紋付の萌黄絹の袱紗包と、重筥らしい包を持つて来て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、

「一寸待つて下さい。」と袱紗の包を解いて、

「之を御仏前へ。」

西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔絵の盆に載せたまゝ其へ出す。

「おやまあ、御見事な、まあ。」

と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、

「旦那様、御覽遊ばしまし。」

と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百々礼を述べて、

「どれ、御覧に入れて参りませう。」

と起ちかければ、

「それから末だお重だ。これは御菜です。何か旨い物を持つて来やうと思つたけれど、此際の事だから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ。尤も代物は精進だけれど、少しは蔭に如何様がしてあるかも知れませんよ。」

と笑ひながら包ごと元の方へ推進る。

「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭様で私も大助りでございます。旦那様、又お重を戴きました。」

「それは難有う。」

と柳之助はやう／＼礼を言ふ。

葉山は手焙を引寄せて、葉巻の細巻を吃しながら、柳之助の又思出しか、俯いてゐるのをじろりじろりと視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾を一握出した。而して隅の方へ投遣ると、其が三つになつて転がる。今度は右から又二つ引張出した。それをも投出して了つて、袖で目を擽る。

葉山は驚いて見てゐたが、

「何だ、あの手巾は？」

「どうも涙が出て困る。」

「それは悉皆濡れてゐるのかい。なるほど臉が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」

と綾絹の白の手巾を火鍵の上にせせば、芬と香水が匂ふ。『好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が来ると好い香がするつて。』

「否味だと言つたのだらう。」

「君も知つとるけれど、妻は決して悪口を言はんかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に信用して居つたから。」

生前でさへ妻の事を説く柳之助である。まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、余り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と話頭を転じて、

「時に。」と言出した。

柳之助の胸の内は、はや妻の事に就いて万感に満ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は耳にも入らぬ。

「実に慙云ふ時に妻が居つたら御馳走をするのだけれど、

居らん、妻は居らん。」

と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。

「然しね。」と葉山は又言出すと、

「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」

「それは尤だ。然し……。」

「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」

「那麼無理な事があるものか。」

「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」

彼は最愛の妻の氣に障つた事を不図言つて、その不機嫌を見て、遽に執成すやうに、詫でもするやうに、頻に断つた、固より無理などを言ふ意ではなかつた、思余つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であると思着いたので。すると、「類さん」の艶然とした面影が胸に浮むのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隠頭てゐるが、それが忽ち不興の眼色をして怨めしさうに視たのである。

柳之助は済まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心が落着かぬ、則ち幻の面影は其色を釈かぬのである。耐りかねて柳之助は、

「妻はね、妻は……。」

と言出したが、さて何と言つたものやら、有繋に惑つたのである。

「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛相が好かつた。」

とは言つたが、是では未だ其不興を釈くには足らぬと思

つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか、又涙ぐむでしふ。

「時に、君は学校の方は如何した？」

と葉山は持扱つてゐた「時に」をやう／＼用立てる。

「学校？ 学校なんぞは管はん、もう否だ。」

苦い顔をして柳之助は頭を掉る。

鷺見柳之助は大学の地質学専科を卒業して、今は東京物理学院の教授を勉めてゐるのであるが、勤勉であり、懇切であり、而も十分に実力のある所から、学院の気承も生徒の信用も極めて好い、然には試験の点が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に対する非難の声は全く無い。学院では実に難有い大事の人になつてゐるのである。

「管はぬたつて、然し行かないぢやないか、自分の職業ぢやないか。余り長く退いてゐたら、学校の方で差支へるだらう。」

「差支へても管はん。」

「那麼自棄を言つちや困るね。もう少し休むだら出る方が可いよ、独で引籠つて居るよりは却つて氣が霽れるから。」

「喉もう何を為るのも否だ、何も出来は爲んよ。實際僕は生きとる樂が無いのだ、生きて居らうとは思はんよ。」

葉山は手酌の麦酒を一口飲むで、

「困つたもんだ。」

と櫓の上へどつきりと靠れる。

「僕は実に寂しくて可かん。君、それは実に寂しいものだよ。それに這雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何所へ行つても家中線香の氣がして、それが実に耐らんね。慫云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寐てゐられやせん。設然うなつたら如何せうかと思ふと、実に心細い。今でさへ這雨心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」

惣毛堅つたやうに柳之助は身顫をする。

「那麼事まで考へた日には際限が無い。どうも今更爲方も無い、何も天命と思切るより外は無いのだ。」

「僕は到底思切れんよ。」

「思切れんと云つたつて……………」

「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は残酷だ。」

「残酷は過いね。君が何程思切れないと云つた所で、お類さんが生返るぢやなからう。」

「ぢや思切つたら生返るか。」

と柳之助は急立つた気色。

「又那麼無理を言ふよ、君の心は十分察してゐるわね、けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の為に体を毀しても苦

しくないのだね。」

返答に窮へてゐる間に葉山はコップの酒を飲尽して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。

「麦酒はもう無いかい。」

「無けりや買はう。」

と喚鈴を鳴して元に聞けば、幾許もあると、又一口を抜いて来る。

「まあ一盃飲むで、もう那麼話は止さうよ。」

と葉山は一つ差した。

「他の話より此話が可いのかから、もつと為てくれ給へ。」

「可けないよ。始終考へては鬱いでゐる所へ持つて来て、又其話をしたら愈泣かせるのだ。不吉な話は止さう。」

「不吉とは？ 君……………」

柳之助は口へ持つて行つたコップを控へて、屹となる。

「いや、悪かつた。私は今日は君が独で寂しからうと思つて、見舞に來たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」

身縊をして、葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。

「あゝ、悪かつた、僕が悪かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」

苦に柳之助は詫びる。

「それぢや然云ふ話は止すかい。」

と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。

「止す、止す。」

と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、

「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突付ける。

此子供らしい所が葉山の柳之助に惚れてゐる所で、彼が他の思はくをも管はず、直に「妻が」と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも、皆此子供らしきからである。

「那廢話は止すと云ふなら。」

と恩がましくコップを受けて葉山は又火燵に入る。

「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤独だ。」

盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲団に

顔を推付けて柳之助は又鬱き出す。

愁ひ合手になつてゐたら、弥思い出させるばかりと、

葉山は不如戯弄して了ふ氣で、

「おい御酌は？」

「や、忘れた。」

と慌忙しく壺を取つて注ぐと、たたりと一雫ほど。兩個

は思はず顔を見合せる。

「何だ、壺が違つてゐるよ。」

柳之助は済したもので壺を替へて酌をする。滾々とする

酒を見ながら葉山は少しく笑を帯びて、

「有る酒ならば慙して出る、ねえ驚見。」

と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて、柳之助はおのれの手元を見い見い葉山の顔を眺める。

「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壺で酌をすることは出来ない」と云ふ事を知つてゐるぢやないか。」

「それが……………」

と柳之助は怪訝な顔をする。

「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、

余り然う快々思はないが可いと云ふのさ。」

と一口附けて、

「肴をくれたまへな、その鶏子を。君が手づから割つてくれるのさ。」

一個取つて皿の縁へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。

「何を考へてゐるのだ。」

「僕は今日から精進なんだからな。」

「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進は解つたが、今日からは解せないね。今日からとは如何いふ理だ。」

「もう可いよ、可いよ。」